

お楽しみは・・・

サッカー指導者 羽中田 昌

スペイン語で監督のことをエントレナドルという。この単語を分解するとエントレナが「トレーニングする（動詞）」、ドルが「行為者（接尾語）」。つまり監督とは「トレーニングする人」という意味になる。

長きにわたりベスト8止まりのサッカースペイン代表が21世紀に入りW杯を制した。今や代表に限らず世界最高峰と謳われるスペインサッカー。その強さの秘密は何なのか？わたしは日々のトレーニングがカギを握ると考える。グループ戦術、個人戦術の確かな積み上げが選手を成長させチームを強くした。これは国内外で活躍する多くの名将たちの出現にもつながった。彼らは皆、トレーニングで選手を夢中にさせるエントレナドルなのだ。

あの瞬間、確かにわたしは車椅子のエントレナドルを夢見ていた。

妻と2人スペインのバルセロナに渡った。30歳から35歳。本場ヨーロッパでサッカーの指導法をゼロから学んだ。

名門FCバルセロナ、愛称バルサのホームスタジアムをキャンプノウという。最も多く足を運び学びのエモーションを得た場所だ。留学初日エル・プラット空港に降り立ち、真っ先にタクシーで向かったのもここだった。誰もいない静かなスタジアムを「よしっ」とつぶやきながら

仰ぎ見た。数日後の初観戦では、嘘ではなく、まったく違うスポーツを観ていると感じた。

10万を越える人の目がピッチの戦いに釘付け。序盤のゴールキックから始まったバルサの攻撃シーンが今も目に焼きついている。

対戦するバジャドリッドのシュートがゴールマウスを大きく外れると電光石火の如くバルサの選手たちが一斉に散らばり攻撃態勢を整えた。ゴール裏のスタンドから見下ろせば、それは11人が有機的に結びついた1つの大きな固まりのようにも見える。素早いGKからのショートパスで攻撃の狼煙が上がる。後方からパスをつなぐことでゴールを目指すバルサ得意のビルドアップの始まり。バジャドリッドの前線からのプレスがボールホルダー（保持者）に襲いかかった。それでもバルサはGKを除く10人の固まりが効果的に形を変えながら前進していた。膨らんだり縮まったり、左右にスライドしたり。大空をバックにムクドリの大群が固まりとなつて舞う情景を彷彿させた。

「美しく勝利せよ！」。バルサ監督のヨハン・クライフの言葉を思い出し、「これか、これなんだ」とくちびるが動いた。10人の固まりの中でボールとともに連係プレーが生まれ、その連係の中で相互作用する個人プレーが生みだされる。スーパースターのプレーもそうやって生まれる。これは選手の適切なポジショニングをベースに優位性を見いだしながら戦うプレー様式、ポジショナルプレーだった。配置プレーと呼ぶ人もいる。

「え、なにこれ、これまで俺がやってきたサッカーと違うじゃん！」

こうしてバルサの攻撃が徐々にバジヤドリーアのゴールに迫っていった。ゴール裏の車椅子席にいるわたしにも迫ってきた。スタンドの割れんばかりの喚声。ラストパスが鋭くペナルティエリアに入った時だ。大観衆が一斉に立ち上がる。バルサがシュートを放つ！同時に一瞬の静寂。「えっ」、カンブノウから一切の音が消え10万人の目がシュートボールの軌道を追った。永遠のような刹那だった。わたしは息をのみ心の奥底で望んでいた気がする。

「日本の選手たちに、こんなサッカーがあることを知ってほしい。いや、このサッカーを日本に伝えたい。このサッカーを創るために日本のグラウンドでトレーニングしたい」

バルサのシュートが惜しくも枠を外れるとカンブノウに音もどった。それはスタジアムを揺らす10万人の溜め息。こんなにも壮大で心躍る溜め息を聞いたことがあっただろうか。温暖な地中海性気候の11月、わたしは微かに震えていた。

あれから31年、気づけば還暦に1つ歳を加えた。プロ監督として5チームを渡り歩いた後、母校蕪崎高校のグラウンドでサッカー部の手伝いをしている。後輩たちとボールを追いかけるがら大声を上げる日々。「適切なポジションをとれ、優位性を見つけろ！」。思いがけない反応をする選手から、わたしの方が教えられる。

トレーニングが実に楽しく、夢中でいる時、今を生きていると実感する。グラウンドの世界はわたしの心の鏡かもしれない。つながることで、共に学び共に成長していく。あの時見た車椅子のエントレナドールの夢がようやく少し動きはじめたようだ。歌舞伎の松本幸四郎さんがテレビでこんなことを言っていた。

「夢っていうのは、60になっても70になっても80になってもあると思うんですね。また、そういう歳になって見る夢が本当の夢じゃないですか？」

お楽しみは今ここから。ちなみにスペイン人の溜め息はやや低音で「アイー」と聞こえた。